

「薄闇と街の灯り」

十年程前までは神奈川県に住んでいた。

その頃は、よく大山に登った。

帰りのバスが山を背にして進むうち、太陽が山に隠れて、あっという間に暗くなる。

小田急線の伊勢原駅に向かう道は、バスが走り始めてしばらくは民家も少なく、バスは薄闇と静寂にすっぽり包み込まれる。

日が沈んで暗くなる。

早く家に帰って、貴重な灯りを大切に使い、夜更かしせずに眠る。

朝は日の出とともに起きて働く。

本来、人の生活はこうであったということを思い起こさせる。

そわそわして喉の奥がうずくような、緊張感に似た感覚にみまわれながら、いつのまにか心が鎮まる。

薄闇と静寂は、バスに揺られる帰り道を特別な時間にしてくれる。

伊勢原駅が近づくと、あっという間に日常に引き戻される。

街の灯りで、やさしい薄闇は塗り替えられてしまう。

自然の力への畏怖もすっかりはぎとられ、まだダラダラ買い物とかしても平気じゃん、みたいな気分にとりこまれていくのだ。

たくさん「便利」が増えて、私もすっかり恩恵に与っている。

自宅から徒歩2分圏内にコンビニが2軒。

夜遅く、仕事帰りに利用している。

だけど時折、人工的な灯りに疲れてしまうこともある。

やさしい薄闇に、むき出しになった神経を包んでもらいたいと思う今日この頃である。

休日、疲れが取れないまま日が暮れる。

食料品やら日用品やら、買いに出かけなきゃと思いつつ、

気温が下がる遅めの夕方によく重たい腰をあげるから、

スーパーからの帰り道はやっぱり夜で、

夜空の下、荷物を積んだ自転車を走らせることになる。

そんな時は、街の灯りに助けられている。